



地域社会における新たな文化の受容と定着に関する 一考察 2つの地域における相撲部屋の受入れの 事例をもとに

著者	澤邊 裕子, 上之郷 奈穂, 李 仁子
雑誌名	東北大学大学院教育学研究科研究年報
巻	66
号	2
ページ	39-52
発行年	2018-06-29
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123156

地域社会における新たな文化の受容と定着に関する一考察

—2つの地域における相撲部屋の受入れの事例をもとに—

澤 遼 裕 子*

上之郷 奈 穂**

李 仁 子***

本稿は、地域社会が新たな文化を受容し、定着する文化的営みを考察したものである。具体的には、大相撲の出羽海部屋の合宿所のある笹川地区、九州場所の宿舎がある新宮地区という2つの地域におけるフィールドワークを通し、これらの地域における相撲部屋の受容と定着について考察した。笹川地区の事例はもともと相撲と縁があった地域の歴史が相撲部屋受入れの素地となり、地域の特性に結び付けられる事例を示した。新宮の事例はもともと相撲文化のなかった土地において、相撲と地域を結び付けるキーパーソンが存在と活躍が地域住民を巻き込み、地域が相撲部屋を受け入れるプロセスを示した。この2つの事例はもともと相撲部屋と縁のなかった地域を相撲と結び付けた「人」の存在があり、人と人の結びつきがあり、それがもともとあってその地域に新たな文化が作られ、その文化がまた新たな人々や文化を招き入れる、という循環プロセスを示すものであった。

キーワード：地域社会、文化、相撲部屋

1. 問題の所在

現代社会の特徴の一つとして、人々やものの活発な往来や移動が挙げられる。新しい人々を迎えるということは、彼らが持つ新たな文化を受け入れるということでもある。本稿では地域社会が新たな文化を受容し、定着する文化的営みに注目する。そのありようを探究する1つの手立てとして、地域社会における大相撲の相撲部屋¹の受容と定着について考察する。具体的には、1つの相撲部屋の地方拠点となっている異なる2つの地域が、いかにこの相撲部屋を受入れ、活動を支援するようになったか、またその支援活動がどのような人々に支えられて実施されてきているかについて、2つの地域でのフィールドワークにより考察していく。さらにそこから、我々が地域社会で新たな文化背景を持つ人々を受け入れる際に、どのような示唆が得られるかについて考えていきたい。

地域社会が新たな文化を受容する過程とその課題に関する研究として近年中心となっているのは、外国人の受入れに関する研究であり、数多く発表されている（例えば岩野2002, 石井2010, 横田

*教育学研究科 博士課程後期

**教育学研究科 博士課程前期

***教育学研究科 准教授

2016など)。文化の異質性という観点から見た場合、外国人の受入れと相撲部屋の受入れとでは、大きな差がある。相撲は日本古来の伝統的な文化であり、異質や異文化という捉え方はそぐわないとも言える。しかしながら、何らかのきっかけによって地域が新たな集団を受け入れることになり、定着することを支援するようになるその人間生活のありようは、必ずしも外国の人々や文化に限るものではないのではないと考える。日本文化を背景とする人々であっても、地域に新しく参入し、根付いていく過程²には、地域社会に新しい文化を受容する寛容性のようなものが存在しているのではないと思われる。そのような問題意識を持ちながら筆者らは、日本の伝統文化の象徴として認識されることの多い、相撲という文化とその営みに関わる人々に注目した。管見の限り、地域社会がいかに相撲部屋を受入れていくかというプロセスに着目した学術的な研究は十分に行われていない。よって、本研究で得られた知見は日本におけるこれからの地域社会における新たな文化の受容と定着、創造を考えるうえで参照できるものになると思われる。

2. 研究の対象と方法

本研究では数ある相撲部屋の中でも出羽海部屋を研究対象とし、出羽海部が地方で築いている拠点を取り上げる。出羽海部屋は歴史が長く、江戸時代に創設された由緒ある部屋である。その歴史の長さ、輩出された関取衆の多さ³、また、出羽海一門の本家⁴とされることから、出羽海部屋は名門といわれる部屋である。出羽海部屋が地方に構えている拠点は各地方場所の宿舎である、大阪、名古屋、福岡の3か所に加え、千葉で行われる合宿所の計4か所である⁵。地方場所の拠点は、大阪場所では大阪府堺市にある祥雲寺であり、名古屋場所では愛知県犬山市にある善光寺、九州場所では福岡県糟屋郡にあるタグチ研修センターである。さらに出羽海部屋では毎年夏に合宿を行っており、千葉県香取郡東庄町にある諏訪神社にも活動の拠点を築いている。これらのうち本稿では、夏合宿が行われている「笹川」と、九州場所の拠点である「新宮」という地域に着目する。この2つの地域において相撲部屋が一定の期間滞在するにあたり、どのようにしてその地域が相撲部屋を受け入れているのかを考察していく。

本研究はフィールドワークの手法を用いた調査、文献研究、そして本稿執筆者3名によるディスカッションによって構成されている。フィールドワークに関しては、2014年から継続的に出羽海部屋に通い相撲部屋の調査を行っている。当初は出羽海部屋の朝稽古の見学から始まったが、そこから出羽海部屋に所属する親方と知り合うことができ、親方の紹介により出羽海部屋の活動を支援している人々との交流が生まれた。こうして徐々に相撲部屋、そして相撲部屋を取り巻く環境の調査研究を進めていくことができ、その延長線上に笹川、新宮の2地区での調査が位置付けられている。

3. 異なる地域における相撲部屋の受容

3.1. 土着の文化との融合—笹川合宿

(1)地区の概要

出羽海部屋の合宿は毎年8月に千葉県香取郡東庄町笹川にて行われる。図1のように、笹川地区

は千葉県香取郡東庄町にある。近くを利根川が流れるという立地で、人口は5653名⁶である。

東庄町には相撲とゆかりのある文化が根付いており毎年行われる秋季大祭、この地に伝わる天保水滸伝という物語、東大社にある野見宿禰の像が挙げられる。

秋季大祭は笹川地区にある諏訪神社で、毎年7月の最終土曜日に行われる。奉納相撲がこの祭りのメインとなる。奉納相撲では自衛隊員や地区の子供達が諏訪神社にある土俵に上がり、相撲を取る。

天保水滸伝は実話とされる物語で、天保時代の笹川繁蔵と飯岡助五郎の闘争についての物語である。東庄町郷土史研究会(2003:9)には、「天保水滸伝の主人公笹川繁蔵は、子供の頃より相撲が強く力自慢であった。力士となるべく江戸に出て、千賀ノ浦部屋に入り一年程いたといわれる相撲好きであった」、「諏訪神社境内の土俵の向正面に、相撲の神様といわれる野見宿禰の石碑を建立したのが繁蔵であった。(中略)碑の建立は、繁蔵の相撲好きからくるものは勿論であるが、主な目的は水害・冷害で困窮した農民救済のための資金調達であった。諏訪神社の秋季大祭の奉納相撲に合わせての落成式で、諸国の親分衆を招き、会場の十一屋において盛大なる花会を開催した」のように記載され、この地域と相撲との関わりがうかがえるものとなっている。

さらに、東庄町にある東大社には、写真1のように相撲の神様とされる野見宿禰(のみのすくね)の像がある。野見宿禰は『日本書紀』にも記される伝説上の人物であるが、大和で剛力無双をうたわれた当麻蹴速(たいまのけはや)と相撲をとり、勝利した人物であるとされる(和歌森2003:17)。

このような伝説や野見宿禰像が地域に存在していることから、笹川はもともと相撲文化の素地があった地区であることがうかがわれる。



図1 笹川合宿が行われる東庄町の位置



写真1 相撲の神様とされる野見宿禰の像

(2)合宿の始まり

出羽海部屋の笹川合宿は2001年から始まり、2017年で17回目の開催となった。出羽海部屋では、笹川での合宿が行われるようになる前、静岡県御殿場市で合宿を行っていた。しかし、台風の影響により土俵が使えない状態になってしまっていた。

同じころ、笹川地区で祭りの役員が集まった際に、当時の出羽海部屋の師匠と、部屋に所属している力士2名も参加した。そのうち、当時16歳、序二段の力士に対し、この力士を応援しようという話が持ち上がった。まだ関取になる前であったが、将来強くなると見込まれたのである。そして、この力士を応援するために、後援会が発足した。これが笹川合宿実行委員の前身である。静岡県での合宿が開催できないと頭を抱えていた折、笹川で縁ができたのをきっかけに、笹川で合宿をやってはどうかという方向に話が進んでいった。このように、さまざまな要因が複合的に絡み合い、笹川合宿の開催へとこぎつけた。

(3)合宿に関わる地域の人々とその活動

笹川合宿開催に伴い、実に多くの人々が陰で動いている。合宿実行員会に所属する人々、かつて所属していた人々、また、笹川地区の宣伝を行う笹川観光協会に所属する人々もこの合宿に便乗して活動を行っている。このほか、どの団体にも所属していないが合宿の期間滞在している相撲部屋の人々に対し食事を提供したり、休憩する場を提供したりする人もいる。

合宿開催にあたり、土俵、宿舎をまず確保しなければならない。土俵であるが、笹川には諏訪神社に土俵が既に作られていた。合宿ではこの土俵を使うことになったが、相撲部屋の力士が稽古をするには改善が要された。

合宿開催に伴い、必要なものの準備が始まる。2週間の合宿期間中で必要なものは、部屋から持って来るものと、笹川の実行委員で用意するものがある。笹川合宿における実行委員たちが行う活動の特徴としては、もともと笹川地区にあるものを利用できる場合は利用し、新しく必要となった場合は自分たちで用意するということが挙げられる。その具体的な例を以下に挙げることとする。

合宿をするためには、部屋の力士たちが寝泊まりする場所を確保しなければならない。この合宿では、出羽海部屋合宿用の宿舎を新しく作るのではなく、もともとある笹川地区の集会所を宿舎としている⁷。また、食事の用意を手伝う人物がおり、合宿第1回目から手伝いを続けている。

宿舎といっても、集会所を宿舎として利用しているので、お風呂はない状態である。そこで、写真2のような簡易式のシャワールームが手作りで作られた。

宿舎のほかに、合宿を行う上で欠かせないものが稽古をする土俵である。合宿では、笹川地区の諏訪神社にある土俵を使用する。宿舎からの距離も近く、歩いて5分ほどの距離にある。出羽海部屋の力士たちは稽古場への移動に自転車を使っている。この自転車は普段両国の出羽海部屋で使っているもので、合宿所まで運んできている。

笹川地区で毎年行われる秋季大祭では、



写真2 簡易式のシャワールーム。奥に見える建物が幕下力士の寝泊まりする宿舎

この土俵で奉納相撲がとられていた。しかし、相撲部屋に所属し相撲を取る力士にとっては、この土俵では稽古をすることはできない。同じ土俵でも稽古をする土俵と、神社にある土俵では全く異なるからである。そこで、出羽海部屋の力士たちが稽古ができるような本格的な土俵にするため、笹川の人々が立ち上がった。彼らがどのように動いたのか、その工夫を、4つに分けて説明する。

まずは、土を入れ替えることが行われた。もともと土俵に使われていた土では、とても柔らかい土であるため、力士がけがをしてしまう恐れがあったからである。そして、土俵の周りに敷かれている俵も劣化しにくいビニール製のものを使用した。これまでのものは、野外にあるため雨風に吹き曝しになっており、すぐに劣化してしまっていた。それを、ビニール製のものに変えることで、より俵が長持ちするようになった。また、稽古場には水道が完備されていなければならない。稽古で土俵が乱れた際に水を撒いて箒で整えたり、力士が口をゆすいだりするのに水が必要とされるからである。そこで、水道もホースで水を引いてきて簡易式の水道をこしらえた。土俵のすぐ近くに設置されている。この作業も笹川地区の人によって行われた。

これらの準備が整い、土俵の土が完成し、無事に合宿を迎えることができた。しかし、野外にある土俵のため、雨が降ってしまうと土俵も濡れてしまううえ、雨の程度によっては稽古をすることができないこともあった。そこで、雨が降った場合は柱だけを立ててその上にビニールシートのせ、それをもって屋根の代わりにしていた。しかし、雨をしのぐことはできても、ビニールシートにたまった水を下におろす作業をしなければならない。この作業は早朝に行われた。そこで、より本格的な屋根を作るという話が持ち上がった。そして写真3のような屋根が完成したのである。この屋根を作るにあたり、笹川地区の人々が、それぞれの職業を活かし、自らの手で作成に至った。設計は建築関係の仕事をしている人が行い、必要な材料は工事現場で働いている人が不要なものを調達する、といった具合である。

以上のように、土俵の土を入れ替える、俵を入れ替える、水場を作る、屋根を作るといった工夫により、稽古ができる土俵が誕生した。

笹川と出羽海部屋のつながりの強さを表す一つの象徴として、合宿10周年を記念して建てられた写真4の記念碑が挙げられる。

この記念碑は、合宿で使う土俵のある諏訪神社の土俵のすぐ近くにあるものである。石碑の周囲を囲っている石は、笹川に住む人の家の庭から調達されたという。この家の人物は、合宿開催にあたり土俵の屋根を設計したり、写真5にあるような合宿最終日のファン感謝イベントで行われる赤ちゃん土俵入りで、子供用の廻しを作成したりと、合宿に積極的に関わっていた。



写真3 新たにつくられた土俵の屋根



写真4 諏訪神社の土俵近くにある記念碑



写真5 赤ちゃん土俵入りの様子

(4) 笹川における相撲文化の発展と新たな課題

相撲の伝統的な祭りが開催される地域は、全国的に見られ、主に神社で行われることが多い。笹川もそのような地域の一つであったが、出羽海部屋の力士たちが毎年夏にやって来るということで、笹川地区はさらなる盛り上がりを見せるようになった。秋季大祭の奉納相撲では現役の力士が土俵に上がるようになり、より華やかになった。また、出羽海部屋と笹川が関係を持つようになったことにより、笹川小学校で相大会が開催されるようになった。さらに、小学校の校庭にも土俵が作られた。出羽海部屋の合宿が17年間笹川地区で続いていることの背景には、笹川地区が相撲とゆかりのある地域であるというのが大きな要因であると考えられる。ただ、笹川は相撲とゆかりのある地域であるといっても、以前秋季大祭の奉納相撲で活躍していた青年団が今はなくなっており、また天保水滸伝という昔の物語があったとしても、それはただの物語として残るもので、現代を生きる人々に直接的な影響を及ぼしているとは言い難い現状であったと考えられる。そのようなときに出羽海部屋の合宿が開催されることとなった。この合宿が契機となり、これまで笹川に根付いていたものの、少しずつ色あせてきたと思われていた相撲が再び息を吹き返す、という現象に結び付いた。昔とまったく同じ形ではないにしろ、また違った形で笹川が相撲のまちとしての色を帯びてきたと言えるだろう。

このように地域に影響を及ぼす中、課題も生まれてきた。相撲部屋が合宿に来るということで、新しく土俵の屋根を建設したり、土俵の土を入れ替えたりという変化が生じた。もともと秋季大祭の奉納相撲が行われる土俵であったのに、相撲部屋の力士たちが使うためにこれまでの土俵を変えてしまうということに、反発の声もあった。一見、合宿開催で地区全体が盛り上がっているようにも見受けられるが、これまでの神社の土俵が変わることに対し反対の声があがるなど、地区の全員が全面的に好意的に受け入れているわけではない。しかし、反発の声があったり、相撲部屋を地域のアイデンティティと結びつけていったりと、合宿が開催されなければ経験しなかったであろうこ

とを経験しながら、合宿は毎年行われているのである。

3.2. キーパーソンがつなぐ相撲部屋と地域社会—九州場所宿舎

(1)地区の概要

出羽海部屋の九州場所宿舎は図2のように、福岡県糟屋郡新宮町新宮にある。新宮の人口は727名である⁸。海に面している地区で、近くには新宮漁港がある。

(2)新宮宿舎の始まり

この宿舎は1992年に建てられ、この年から出羽海部屋の九州場所の宿舎として使われた。以前の出羽海部屋の宿舎は、福岡市内にある東公園日蓮護持会という寺である。寺の本堂を宿舎としており、稽古場はその都度敷地内の駐車場にプレハブで作っていたという。本堂に風呂場はなかったため、力士たちは宿舎の近くの銭湯に自転車通っていた。この寺には福岡市指定の有形文化財の日蓮上人立像⁹があり、格式のある寺とされている。

しかし、相撲部屋の宿舎として開放することに誰もが賛成していたわけではなく、宿舎としての利用を続けていくことが難しくなっていた。ちょうどその頃、当時の九州出羽海後援会の副会長をしていた人物が、新宮町に宿舎として使えるような場所があるということで、九州場所の取り組みが行われる国際センターのある福岡市内からは少し離れるが、新宮町に新たな宿舎を建てることになった。宿舎として使えるような新宮町の場所を紹介した1992年当時の九州出羽海後援会副会長は、当時の出羽海部屋の師匠と同郷の長崎県五島列島の出身であった。その縁もあり、新宮町に宿舎を建てることになったのである。

写真6にあるように、現在の宿舎は2階建てで、1階は食堂、炊事場、お風呂、トイレ、大部屋があり、2階は親方衆、関取衆の個室がある。相撲社会では親方衆、関取衆には個室が与えられるという慣習がある。1階にある大部屋は2つに分かれており、それぞれ幕下力士の寝泊まりする場所、序二段、三段目力士の寝泊まりする場所となっている。2017年の11月場所では、幕下力



図2 九州場所宿舎がある新宮町の位置



写真6 出羽海部屋の九州場所宿舎の入り口

士の大部屋では6人、序二段、三段目力士の大部屋では8人となっていた。土俵はまた別の建物の中にあるが、同じ敷地内にある。この宿舎の特徴として、もともとある建物を一定期間のみ宿舎として利用するのではなく、一から相撲部屋の宿舎として建てられたという点が挙げられる。

(3)宿舎の建設に関わったキーパーソン、Tさんの存在とその活動

現在の宿舎がある場所は、もともと宿舎建設当時の九州出羽海後援会の副会長の会社が所有する砥石工場があったところである。しかし、時代の流れと共に、安くて手ごろな石が大量生産されるような技術が生まれ、その工場は閉鎖へと追い込まれてしまった。東公園の寺を宿舎として借りることが難しくなってきた時期とも重なり、既に閉鎖が決まっていた新宮町にある工場の跡地を出羽海部屋の宿舎として利用すればよいのではないかという話が浮上し、東公園の宿舎から新宮町への宿舎移転に至った。

九州場所の宿舎建設にあたり、中心となって活躍した人物がTさんである。Tさんは当時九州出羽海後援会の副会長をしていた人物の弟にあたり、宿舎が建つ場所にあった砥石工場を所有していた人物である。彼にとっては、長年働いてきた、自分の人生ともいえる工場である。そして、工場の閉鎖が決まって間もなく、出羽海部屋の九州場所宿舎としての利用が決まった。

宿舎移転が決まり、いよいよ工場を取り壊す段階になった。取り壊しの時点では落ち込んでいたTさんであったが、宿舎の建設が始まると、目の色を変えて工事に取り組んだ。1992年の九州場所に間に合わせるため、工事が急ピッチで進められていった。

一部を除いて一度工場を更地にし、土俵、トイレ、風呂場、ちゃんこ場、親方衆、関取衆の個室、番付下位力士が寝泊まりする大部屋といった建設が始まっていった。もともとある建物を宿舎の一部として利用するため、補強の工事も行われた。

砥石工場には、さまざまな機械、道具があった。それらのものの中には宿舎建設の際に処分されたり、他の工場に送られたりするものがある中、宿舎建設に利用されたものもあった。まず、砂をふるう機械である。新宮町はすぐ近くに海があるという立地のため、砂浜を持ってきて機械にかけてふるい、細かい砂だけを抽出して、土俵の内部の土として使われた。また、重いものを運ぶフォークリフトも、宿舎建設の際に活躍した。宿舎の前の道路は道幅が狭く、荷物を載せたトラックが宿舎までたどり着けないということがあった。そんなときにこのフォークリフトが活躍したのである。宿舎近くにトラックを停めたあと、宿舎まではフォークリフトで荷物を運んでいった。このように、元砥石工場ならではのやり方で宿舎の建設が着々と進んでいった。

建設や準備は部屋の力士たちが来る直前まで行われた。出羽海部屋の先発¹⁰も2ヶ月ほど早めに福岡に乗り入れ、宿舎の準備がすすめられていった。建設当時は出羽海部屋に在籍する力士の数も多かったため、室内に本格的な土俵を作ったのとはまた別に、写真7にあるような隣の空いたスペースにも土俵をこしらえた。この土俵は屋外につくられたものではあったが、殺風景ではいけないというTさんの計らいで、周囲に花も植えられた。

土俵が新しく作られるときには、「土俵開き」が行われる。宿舎の整備は、土俵開きが行われる直

前まで行われた。相撲部屋の宿舎であるがために様々な工夫がなされた。アスファルトで舗装してある敷地内は、裸足で歩く力士たちが怪我をしないようにと、ホースで水がまかれ、デッキブラシで念入りに磨かれ、こまかいガラス片などを取り除いていった。また、相撲部屋の雰囲気を引き立てる相撲幟を立てるための土台をこしらえた。

新宮町に新しい出羽海部屋の宿舎の土俵が誕生したということで、1992年10月26日、盛大に土俵開きが行われた。この土俵開きでは多くの関係者、近隣住民が招かれた。



写真7 土俵がある建物。手前の空いたスペースにかつて土俵があったが、今は使われておらず更地となっている。

(4) Tさんの周辺の人々の協力により地域に溶け込んだ相撲部屋

宿舎建設に際し、中心となって活動したのが、かつての砥石工場の所有者であった前述のTさんであるが、そこにはTさんだけではなく、Tさんの家族、親戚らの協力があった。

食器類が足りなくなった場合、Tさんの家から食器を持ってきて宿舎で使うこともあった。また、親方、関取の個室にはカーテンがなかったため、Tさんの奥さんが手作りでカーテンを作った。足りないものを補充するだけでなく、力士の着ている着物が破れてしまった場合は裁縫が得意なTさんの奥さんが縫ってあげることもあった。また、宿舎のテレビでは映らないテレビの番組があった場合はTさんの家に行って見せてもらうということもあった。それぞれが得意な分野で宿舎に足りないものを補うということが行われ、ちゃんこの用意で流し台が足りないということになった場合、新たに流し台を作られもした。これも手作りである。また、Tさんの家族だけでなく、近隣住民も宿舎で足りないものを補った。宿舎で利用している冷蔵庫は、近所の八百屋で使用していた業務用の冷蔵庫を譲り受けたものである。

一度建てられた宿舎は一年中その地区にあり、年に一度、九州場所の時期に部屋の者たちが宿舎にやって来るのを待っている。彼らが本場所に向けて生活する期間のみ、その建物は宿舎としての役目を果たすのである。しかし、場所に向けて部屋の人々が宿舎で生活をするにあたり、まず住めるような環境を整える準備をする必要がある。掃除をしたり、荷物を整理したり、といったことが行われる。これらの準備にあたるのは先発と呼ばれる力士たちであり、通常3、4名で行われる。先発組は、一足先に宿舎に向け出発し、本陣が到着する前に準備をする。これは、どこの宿舎に行く場合も行われるが、九州場所の新宮にある宿舎は少し他の宿舎とは異なる。宿舎を管理している人により、先発組が来る前から、出羽海部屋の宿舎として機能するよう準備をするのである。1年間ほぼ使われない状態に置かれた宿舎は、やはりほこりがたまっていたり、建物自体が傷んでいたりする。それを、先発が来る前にTさんとその家族が準備を済ませておくという配慮がなされている。

宿舎での生活が始まると、近隣住民も部屋の活動を支えるようになった。宿舎開設当時の部屋の師匠は長崎の五島列島出身ということもあり、部屋への差し入れに五島列島で取れたブリが大量に届いた。宿舎の冷蔵庫には入りきらなかったため、近くにある水産加工工場の業務用冷蔵庫も使い、ブリを保存したこともあったという。

また、力士たちが東京へ帰っていった後は、再びTさんと、その家族による掃除が始まる。もちろん、部屋の力士たちは東京に戻る前に掃除をするが、部屋の者が1か月以上生活した後は、掃除できていないところがある。それをきれいに掃除して、1年後再び部屋の宿舎として使われる日を待つのである。

(5)地域住民に開かれた宿舎へ

力士たちが宿舎にやって来るのは、本場所が始まる前である。本場所が始まる前には、地域の方を招待し、そこでちゃんこを振舞うということが行われていた。本場所が始まってしまうと部屋の力士は各自の取り組みがあり忙しくなるため、場所前に行われていた。

毎年力士が宿舎にやって来るが、その時期は九州場所の行われる11月である。宿舎は1年中新宮町にあり続け、年に一度の九州場所で力士たちが来るのを待っている。しかし、この宿舎は九州場所開催期間にだけ活躍していたわけではない。新宮町では毎年1月に、子供たちが真冬の海に入っというお祭りが行われる。この宿舎のお風呂は、その冷えた足先を暖めるためにも利用された。また、高校の部活の合宿所として使われ、さらには近所の子供達の遊び場としても使われたこともある。このように、もともと出羽海部屋の九州場所の宿舎として建てられたものが、地域住民たちにも開かれ、利用できる場所にもなってきた。

宿舎は2017年で25年目を迎えた。月日が経つにつれて宿舎の老朽化が進み、また部屋の力士数も減少していった。また、それまで部屋と宿舎に情熱をもって接していたTさんも、病気のために亡くなった。新宮の出羽海部屋宿舎は、以前ほどの盛り上がりはなくなってしまったとも言える。屋外につくられた土俵も、今は空き地となっている。相撲部屋を彩る華やかな相撲幟も、風になびいたときの音に対する苦情や、新しく建つ家の増加から、その本数も減った。

しかし、宿舎を取り巻く環境や出羽海部屋に所属する力士が変わっていく一方で、九州場所の時期には後援会に所属する方々、近隣住民の方々を招いての食事会が続けられている。形が変わりながらも、地域住民の交流の場として機能し続けていると言える。

以前とまったく同じやり方で宿舎での生活を続けることは出来なくとも、宿舎建設当時を知っている地域住民との関わりは途切れてはいない。変化の中にありながらも、相撲部屋は地域住民との関わりを切らさず、交流を続けているのである。

4. 考察と今後の課題

本稿では、出羽海部屋における笹川合宿、九州場所の新宮宿舎の事例を取り上げ、この2つの地区がどのように相撲部屋という集団を受容しているのかを眺めてきた。

まず、合宿が行われる笹川地区では、もともと笹川地区にあった相撲の文化と結びつけて地域のアイデンティティがいきるような合宿となることで、相撲部屋という新たな文化を持つ集団を受容することができている。毎年行われていた秋季大祭では現役の力士が加わるようになり、祭りそのものを変化させながらも、相撲部屋の定着へと結びつけていると言える。そして、この合宿では合宿実行委員が中心となって合宿の運営を支援している一方で、様々な役職の人物が合宿に携わっている。合宿実行委員として合宿の企画・運営に携わる人、出羽海部屋後援会に所属している人、観光協会に所属していて合宿にも参加している人、特定の組織に所属していないが部屋の力士に食べ物を振舞ったり、稽古後の自由時間の際に力士と交流を持ったりする人といったように、地域住民がそれぞれのやり方で合宿に携わっていることが見えてきた。

一方の九州場所の新宮宿舎の事例では、キーパーソンとなる T さんの活躍が、相撲部屋という集団と地区の人々を結び付ける働きをしてきたことが明らかになった。九州場所の宿舎はもともとある施設を間借りするのではなく、新しく建設されたため、建設に際し人手が必要とされ、またさまざまな物資が必要とされた。相撲部屋、後援会、そして地域住民がそれぞれの形で宿舎の建設、そして九州場所の期間中の滞在の支援を行った。本場所では、力士たちは1つでも多くの勝ち星をつけようとする。新宮の宿舎では、本場所で土俵に立つ力士たちをできる限りサポートしてやりたいという T さんの思いから、宿舎にやって来る力士たちを迎える準備をし、生活に必要なものをサポートする。東京へ戻っていったあとも、宿舎の掃除をし、再び1年後に宿舎として使われる時期が来るまで、T さんが管理をする。一番の支援者であった T さんが亡くなってからは、力士たちを応援しようとする動きにかつてほどの勢いはなくなってしまったが、宿舎は相撲部屋と地域住民の交流の場として活用が続けられ、地域社会に受け入れられていた。

この2つの地域の事例は、地域の特徴の1つ「相撲文化」を特化させることで、相撲部屋を受容していった笹川、そしてキーパーソンの活躍により地域住民を巻き込むことで相撲部屋を地域に溶け込ませようとした新宮という、それぞれの地区の異なる文化の受容と定着の在り方を示した一方で、一つの可能性も浮き彫りにした。それは「人と人のつながりから文化が作られ、その文化がまた新たな人を招いて受け入れる」という循環プロセスである。笹川はもともとさまざまな伝説や記念碑、祭りが継承されていた相撲文化の素地があった土地であり、それが出羽海部屋の合宿を行う上での接着剤のような役割を果たした。一方の九州場所の宿舎である新宮は、相撲文化の素地があったとはいえない土地であったが、キーパーソンの存在により、相撲部屋やその宿舎が地域に受け入れられるようになった。新宮の事例は、相撲部屋の「宿舎」という、目に見え、人が集える場所の存在がその地域における新たな文化となり、人を招き入れる素地となりつつある可能性を示すものとなっている。それはまた、過去において笹川もそうであったのかもしれないと推測させるものである。この2つの事例は最初に相撲を結び付けた「人」の存在があり、人と人の結びつきがあり、それがもともとあってその地域に新たな文化が作られ、その文化がまた新たな人々や文化を招き入れる、という循環プロセスを示すものであった。

今後は、出羽海部屋の他の活動拠点(大阪、名古屋)にも範囲を広げ、その活動拠点がどのように

地域に受け入れられてきたかを調査していきたいと考える。さらに、相撲に限らず、既存の地域住民が新たな流入層を受入れ、新たな地域社会を形成していくありようについても探究していきたい。

【注】

- 1 大相撲の根幹ともいえる相撲部屋は、「江戸時代の中期に、当時の職業相撲のボスであった雷権太夫が深川八幡境内の勧進相撲の責任者として奉行所から許しを受け、職業的に力士を養成するようになったのが始まり」（生沼1979：1）とされる。
- 2 既存の地域住民と「よそもの」とされる新しい流入層とのコミュニティ作りに関する論考として、柴田（2006）のような例も挙げられる。
- 3 ベースボールマガジン社（2017）によると、昭和以降だけでも入幕力士が89人であり、創設以来9人の横綱、7人の大関を輩出してきた（p.8）ことから、相撲界において絶大なる存在感を示してきたとされる。
- 4 一門とは、「弟子が師匠から独立し新しく相撲部屋を興すなどして、縁続きとなった複数の相撲部屋を総称するという言葉」（金指2011：21）である。
- 5 本拠地を都会に構え、地方で拠点を築き上げるという構造は、企業や会社においてよく見受けられる。相撲部屋も同じように東京周辺に本拠地を構え、各地方場所（大阪、名古屋、福岡）にもそれぞれ拠点を構えている。
- 6 平成29年4月1日現在。東庄町ホームページ参照。
- 7 集会所は2か所を借りており、広い方の宿舎では序二段、三段目の力士が、狭い方の宿舎では幕下力士が寝泊まりする。この2か所は隣接しており、歩いてほしい3分ほどの距離にある。このように、宿舎の部屋は番付で分けられることが多い。食事は序二段、三段目が寝泊まりする広い方の宿舎でとっている。
- 8 平成30年2月末現在。新宮町ホームページ参照。
- 9 「像高は10.6mで、奈良の大仏（14.87m）、鎌倉の大仏（11.44m）に次ぐ、国内第三位の巨大青銅像である」（福岡市の文化財ホームページより）
- 10 本隊よりも早めに乗り込み、宿舎の掃除などをして滞在できる環境を整える。

【参考文献】

- 石井恵理子（2010）「多文化共生社会形成のために日本語教育は何ができるか」『異文化間教育』32, pp.24-36.
- 岩野雅子（2002）「地域の国際化（異なるものへの寛容性）と市民の国際化（異なることへの寛容性）」『異文化間教育』16, pp.78-91.
- 生沼芳弘（1979）「高砂部屋にみる部屋制度の人間関係」『東海大学紀要 体育学部』8, pp.1-10.
- 金指基（2011）『相撲大事典 第三版』現代書館.
- 笹沢佐保・森安彦（1981）「実録・天保水滸伝」『歴史への招待』15, pp.93-124.
- 柴田和子（2006）「「よそもの」の行うまちづくりと地域住民」『国際社会文化研究所紀要』8, pp.17.
- 東庄町郷土史研究会（2003）『東庄の郷土史』19.
- ベースボールマガジン社（2017）「出羽海部屋の情景－各聖・常陸山をを受け継ぐ、伝統と格式－」『大相撲名門列伝シリーズ1 出羽海部屋・春日野部屋』pp.6-13.
- 横田雅弘（2016）「日本の多文化社会における文化際多様性——地域の現場経験から学んだことは何だったのか——」『異文化間教育』44, 1-17.
- 和歌森太郎（2003）『相撲今むかし』隅田川文庫.

【参考 URL】

東庄町「東庄町ホームページ」 <https://www.town.tohnosho.chiba.jp/index.html>, (2018年3月14日アクセス)

新宮町「新宮町ホームページ」 www.town.shingu.fukuoka.jp/index.cfm/1.html, (2018年3月14日アクセス)

福岡市経済観光文化部「福岡市の文化財ホームページ」 <http://bunkazai.city.fukuoka.lg.jp/> (2018年3月14日アクセス)

A Study of Acceptance and Settlement of New Culture in a Community:

The Acceptance of Sumo Stable in Two Communities

Yuko SAWABE

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Naho KAMINOGO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Lee INJA

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

This paper is a study on cultural activity, highlighting how a new culture takes root or is accepted in a community. We focus on “sumo” - a traditional culture of Japan. Each sumo stable, where the sumo wrestlers stay and practice sumo training, has a regional base in Japan. In this paper, we have considered two communities (Sasagawa and Shingu) that include the well-known Dewanoumi sumo stable. Our study consists of fieldwork in Dewanoumi sumo stable, literature study, and discussion by authors. Sasagawa has the original sumo culture, including festivals, anecdotes and a monument representing the sumo culture. Thus, the Dewanoumi sumo table and Sasagawa are connected. On the other hand, Shingu has no sumo culture. However, a person who belonged to the Kyusyu Dewanoumi supporters' club was connected to the Dewanoumi sumo stable and the Shingu community. These two cases show the cycle of culture: the association of people creates a new culture, and the new culture might associate other people or culture.

Keywords : community, culture, sumo stable